三十歳無職引きこもりだけど
ある日突然勇者に転生しました。

桐原百子

俺が異世界に連れて来られてから、一年半が経とうとしていた。

ある日突然魔法陣で召喚され、トランプのキングのような王様に「魔王を倒すために勇者として冒険に出て欲しい」と言われたときは戸惑ったが、何だかんだでちゃんと仲間も集まったし、修行としてモンスターを倒していくうちに少しずつレベルも上がっていった。まだ魔王を倒すには弱いが、倒しさえすれば一生豪遊ができるほどの報酬を授けると王に言われたので、今は強くなるために毎日モンスターと戦っている。

元の世界に戻ろうとは全く思わない。

記憶は日に日に薄れているが、元の世界の俺は無職だった。二十五のときに鬱で会社を辞め、それから働けずにずるずると三十まで引きこもりをしていたのだ。正社員として働いている姉に、よく詰られていたのをうっすらと覚えている。もう、あんな生活を送りたくはなかった。

「どうなさったんですか、レオ殿」

スピカの声で、ハッ、と我に返る。

ここは宿屋の一室。

俺たちのパーティーは今、冒険者ギルドの斡旋でイーヤン村というところにモンスターの討伐に来ており、今日もいくらかのモンスターを倒した後だった。この村には凶暴なモンスターが蔓延っていて、村人は昼でも殆ど外に出れない状況なのだという。

「ちょっと考え事をしてただけだよ」

「また、【前いた世界】のことですか？」

桃色の髪を揺らしながら、スピカが尋ねる。

魔術師であるスピカは異世界召喚の知識も持ち合わせており、俺が異世界から来たということを知っているのだ。

「ああ……、少しずつ記憶はなくなってるんだけどな」

「異世界転移を行うと、どうしても記憶は薄れていくんです。私の魔法で、前の世界の記憶をオーブに【保存】することもできないではないですよ？」

「いや、いいんだ。忘れたほうがいいことばかりだから」

「そうですか……、レオ殿がそうおっしゃるのなら」

スピカは哀しそうに微笑む。どうやら気を遣わせてしまったらしい。

彼女は、優秀な魔術師であるということを差し引いても年の割に大人びている。俺の半分程度しか生きていないが、精神年齢は俺よりも上なんじゃないかと思うほどだ。

「でも、忘れないうちに色々スピカに話しておこうかな。ほら、スマホの話とか聞きたがってただろ？」

「ああ、あの不思議な機械ですね。魔術が使われてもいないのに、人の姿を機械の中に封じ込めたり、遠くの人と話したりできるという……」

そう言うと、スピカは古ぼけたノートを開いた。そこには、

◆すまほ

現在時刻を正確に把握する

人の姿だけを閉じ込める

遠くの人と会話をする

朝起こしてくれる

音楽を鳴らす

天気を予測する……、

と、女の子らしいかわいい丸文字で書かれていた。もちろん【前いた世界】の文字ではないが、異世界転移したときに言語理解能力を授かったので俺にも理解することができる。
「レオ殿からいただいたすまほの知識で、私もすまほのような装置を作ろうとしているんです。私の場合は魔導装置になるんですけど……」
「そうなのか。スピカはすごいな」
「えへへ。もっと褒めていただいてもいいのですよ？」
淡い桃色の髪を撫ぜると、スピカは顔をくしゃくしゃにして笑った。こういうところは年相応で可愛らしい。
「そう言えば、アンタレスとレグルスは？」
俺たちのパーティーには、魔術師であるスピカの他に、アンタレスという女剣士とレグルスという弓使いがいる。ふたりとも、スピカに負けず劣らず強力なメンバーだ。
「レグルス殿は今日……、じゃなくて、もうすぐ戻ってきますよ」
「そうなのか。何で分かるんだ？」
「空が暗くなる前に帰る、と言っておりましたので」
外を見ると、空は少しずつ赤みがかってきていた。この様子だと、あと一時間もしないうちに戻ってくるだろう。
「アンタレス殿は、修行のために夜までモンスターを討伐するらしいです」
「さすがだな。俺ももう少し頑張らないとな」
「レオ殿は今でも充分お強いですよ」
「いや、現状に満足していたら魔王は倒せないよ」
「そうですね……、私も頑張らなきゃです！」
そう言うと、スピカは手元の古ぼけたノートをぱらぱらとめくり始めた。スピカのノートには、俺が前に話した【前いた世界】のことや、魔王を倒すためにふたりで考えた魔法のことなどがびっしりとメモされている。勉強熱心な女の子なのだ。
ぼんやりとスピカのノートの文字を目で追っていると、部屋の扉が開く音がした。
アンタレスだろうか、と思って振り返ると、見たことのない若い女の子だった。歳はスピカより少し上くらいで、黒い髪を後ろに縛っている。
「宿屋の人？」
俺がスピカに尋ねると、
「宿屋の人？」
全く同じ言葉を、彼女が聞き返した。
「宿屋の娘さんですよ。ねえ」
スピカが慌てたようにそう言うと、彼女は戸惑いながらも頷いた。どうやら、あまり話すのが得意ではないらしい。
「もうすぐレグルス殿が帰ってくるので、知らせに来たんですよねえ」
「そうです、レ……、レグ……」
「レグルス殿」
「レグルス、様が、お部屋に帰ってきます」
彼女はそう言うと、そそくさと去って行ってしまった。
それと入れ違うようにして、レグルスが部屋に戻ってきた。
明るい金の髪と、色素の薄い茶色の瞳、すらっとした体躯。典型的なエルフ族だ。
「よお、レオ。調子はどう？」
「ああ、今日はけっこう倒せたぜ」
討伐したモンスターの尻尾をレグルスに寄こす。捕ってきた尻尾をまとめておくのは彼の役目なのだ。こうして集めた尻尾をギルドに提出することで、そのぶんの報酬がもらえる。
「レグルスはどうだ？」
「うん、まあ、俺はぼちぼちってところだなあ」
レグルスは近くにあった椅子に座った。
「アンタレスが張り切ってて、多分今日も帰って来ないと思う」
「またか。あいつはもう戦闘狂だなあ」
アンタレスが討伐に夢中になってなかなか帰って来ないのはもういつものことなので、俺もスピカも全く驚かなかった。しかし、その情熱にはほとほと感心させられる。
「帰ってきたときが楽しみだな。めちゃくちゃレベル上がってるだろ」
「そうだな。勇者も、追い抜かれないように頑張れよ」
「もちろんだよ。魔王を倒さなきゃいけないからな」
「ああ」
そう言って頷く、レグルスの瞳は少し悲しそうに見えた。

＊＊＊

人疎らなカフェの端の席で、男女が話し込んでいる。一人はやつれた様子の中年女性で、もう一人は明るい髪色の二十代後半くらいの男性。女は出されたコーヒーに手も付けず、ずっと机の端に溜まった埃を見つめている。男のほうは、アイスカフェラテを時折思い出したように啜りながらも、顔立ちは女と同様に暗かった。
「お姉さん。レオの妄想は、日に日にひどくなっていっているみたいです」
「そう……、なの」
女は、あまり表情を変えずに頷いた。彼が言うことを、

半ば予測していたという様子だった。
「これ、レオが討伐したモンスターの尻尾です」
男はカバンを開け、短いサイズにカットされた、おびただしい量のビニールひもを女に見せた。
「迷惑かけてごめんなさいね、翔太くん」
一本のビニールひもを手に取りながら、女――レナという――が呟く。
「そんなことないすよ。俺も面会したいからしてるわけだし……」
そう言うと、翔太と呼ばれた男はレナのほうに視線を移した。レナは、翔太と目を合わせる代わりに深いため息を吐く。
「レオがおかしくなったのは、私のせいだもの。鬱になったレオを責めたりなんかして……、最低だった。戻れるならあの頃に戻りたい……」
「お姉さん、自分を責めないでください。誰のせいとか、誰が悪いとか、そういうことじゃないですよ」
しばし、二人の間を沈黙が通り抜けた。
翔太は、友人であるレオが妄想の世界に入り込んでしまった原因の一端がレナにもあるということを、心の奥底では分かっていた。だが、それを言って、レオが戻ってくるわけでもない。それに、自分には責任がないと断言することもできないのだ。
「あっ……、そうだ。あの若い看護師さんいたでしょ、早乙女さんだったかな」
澱んだ空気を換えようとするように、無理に明るい声で翔太は言った。
「あの人、レオが言ったことを逐一メモしてるんですよ。それで、レオの中の世界を少しずつ理解してるんですって。写真撮らせてもらいました」
翔太はスマートフォンを取り出し、カメラロールから一枚の写真をタップした。

勇者様　岡山レオさん
スピカ　私　魔術師
アンタレス　岡山レナさん（お姉さん）　剣士
レグルス　唐川翔太さん（友人さん）　弓使い
ギルドの人　川辺悠さん（主治医）

「子供の頃、レオとふたりでやったゲームみたいだなあ」
写真を見ながら、レナがぽつりと呟く。表情は相変わらず暗かったが、口元は少し笑っていた。
「ゲームですか？」
「ロールプレイングゲーム。休日によく一緒にやってたの。夕飯の時間になってもコントローラーを離さないで、お母さんに怒られたなあ」
「……」
翔太はレナの言葉で、小学生の頃のことをぼんやりと思い出した。レオの家で、携帯ゲームで通信をしながら一緒にモンスターを倒していたこと。レオはゲームが巧く、翔太はいつも助けられていた。あの頃のレオは輝いていたと思う。でもそれは、ゲームの中だけの話だ。
「どこで間違っちゃったんだろうなあ、私達……」
レナは先ほど手に取ったビニールひもを電灯に透かしながら、泣きそうな顔で笑った。
私達、というのが誰のことを指すのか、翔太にはよく分からなかった。
レオは確かに狂っているのだと思う。妄想の世界にどっぷりとはまり込み、もう一切現実を見られなくなっている。だが、なんだか楽しそうだった。魔王を倒したいと話すときの瞳は、小学生のとき、一緒にゲームをして遊んでいたのと同じ輝きをしていた。
引きこもりだった頃のレオの生気を失った瞳を思い出すと、翔太は、このままのほうがいいんじゃないか、と思えてきてしまう。目覚めたところでレオは、三十歳の無職の引きこもりなのだ。
だが、そんなことをレナには言えない。彼女はレオが正気に戻ることだけを、只管願い続けているのだ。
「早く戻ってくれるといいな、レオ……」
再び、二人の間に沈黙が訪れた。